

今日の一問 (やまだ塾)

(2008年8月21日掲載)

No.68	「2005年患者調査」に基づいて精神障害者の現状について述べよ。				
解答	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="355 600 555 846">【1】全般的状況</td> <td data-bbox="555 600 1361 846"> <p>①精神疾患患者は1999年以降急速に増加している。</p> <p>②外来患者数は、1999年に170万人であったが、2005年には267.5万人と、6年間で約1.6倍となっている。</p> <p>③入院患者数は、1999年で34.1万人、2005年で35.3万人で、概ね横ばいとなっている。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="355 846 555 1989">【2】入院患者の状況(静態)</td> <td data-bbox="555 846 1361 1989"> <p>(1)疾患による分析</p> <p>①精神病床に入院する患者32.4万人であるが、①統合失調症患者19.7万人(61%)、②アルツハイマー病等の認知症患者5.2万人(16%)の順である。</p> <p>②1999年からの変化では、統合失調症患者が1.5万人(7%)減少する一方で、認知症患者が1.5万人(42%)増加した。高齢化の進行を踏まえると、今後、精神病床において、認知症患者を主傷病として入院する患者が更に増加する可能性がある。</p> <p>(2)年齢階級による分析</p> <p>①年齢分布では、65歳以上の高齢者の割合が増加し、2005年は13.9万人(43%)である。</p> <p>②統合失調症患者の推計平均年齢は、1993年に50歳であったが、2005年には56歳となっている。</p> <p>(3)入院期間による分析</p> <p>①入院期間別の分布では、1年未満が約12.2万人(35%)、1年以上5年未満が約10.2万人(29%)、5年以上10年未満が4.7万人(13%)、10年以上が約8.1万人(23%)である。</p> <p>1999年と2005年で比較すると、1年未満が1.4万人(13%)、1年以上5年未満が1.1万人(12%)増加する一方で、10年以上入院患者数は1.3万人(13%)減少している。</p> <p>②統合失調症では、1年未満22.9%、1年以上5年未満25.3%であるが、10年以上は35.9%である。うつ病を含む気分(感情)障害では、その6割強が1年未満であり、認知症では1年未満と1年以上5年未満がそれぞれ約42%となっている。疾患によって入院期間による分布は大きく異なっている。</p> </td> </tr> </table>	【1】全般的状況	<p>①精神疾患患者は1999年以降急速に増加している。</p> <p>②外来患者数は、1999年に170万人であったが、2005年には267.5万人と、6年間で約1.6倍となっている。</p> <p>③入院患者数は、1999年で34.1万人、2005年で35.3万人で、概ね横ばいとなっている。</p>	【2】入院患者の状況(静態)	<p>(1)疾患による分析</p> <p>①精神病床に入院する患者32.4万人であるが、①統合失調症患者19.7万人(61%)、②アルツハイマー病等の認知症患者5.2万人(16%)の順である。</p> <p>②1999年からの変化では、統合失調症患者が1.5万人(7%)減少する一方で、認知症患者が1.5万人(42%)増加した。高齢化の進行を踏まえると、今後、精神病床において、認知症患者を主傷病として入院する患者が更に増加する可能性がある。</p> <p>(2)年齢階級による分析</p> <p>①年齢分布では、65歳以上の高齢者の割合が増加し、2005年は13.9万人(43%)である。</p> <p>②統合失調症患者の推計平均年齢は、1993年に50歳であったが、2005年には56歳となっている。</p> <p>(3)入院期間による分析</p> <p>①入院期間別の分布では、1年未満が約12.2万人(35%)、1年以上5年未満が約10.2万人(29%)、5年以上10年未満が4.7万人(13%)、10年以上が約8.1万人(23%)である。</p> <p>1999年と2005年で比較すると、1年未満が1.4万人(13%)、1年以上5年未満が1.1万人(12%)増加する一方で、10年以上入院患者数は1.3万人(13%)減少している。</p> <p>②統合失調症では、1年未満22.9%、1年以上5年未満25.3%であるが、10年以上は35.9%である。うつ病を含む気分(感情)障害では、その6割強が1年未満であり、認知症では1年未満と1年以上5年未満がそれぞれ約42%となっている。疾患によって入院期間による分布は大きく異なっている。</p>
【1】全般的状況	<p>①精神疾患患者は1999年以降急速に増加している。</p> <p>②外来患者数は、1999年に170万人であったが、2005年には267.5万人と、6年間で約1.6倍となっている。</p> <p>③入院患者数は、1999年で34.1万人、2005年で35.3万人で、概ね横ばいとなっている。</p>				
【2】入院患者の状況(静態)	<p>(1)疾患による分析</p> <p>①精神病床に入院する患者32.4万人であるが、①統合失調症患者19.7万人(61%)、②アルツハイマー病等の認知症患者5.2万人(16%)の順である。</p> <p>②1999年からの変化では、統合失調症患者が1.5万人(7%)減少する一方で、認知症患者が1.5万人(42%)増加した。高齢化の進行を踏まえると、今後、精神病床において、認知症患者を主傷病として入院する患者が更に増加する可能性がある。</p> <p>(2)年齢階級による分析</p> <p>①年齢分布では、65歳以上の高齢者の割合が増加し、2005年は13.9万人(43%)である。</p> <p>②統合失調症患者の推計平均年齢は、1993年に50歳であったが、2005年には56歳となっている。</p> <p>(3)入院期間による分析</p> <p>①入院期間別の分布では、1年未満が約12.2万人(35%)、1年以上5年未満が約10.2万人(29%)、5年以上10年未満が4.7万人(13%)、10年以上が約8.1万人(23%)である。</p> <p>1999年と2005年で比較すると、1年未満が1.4万人(13%)、1年以上5年未満が1.1万人(12%)増加する一方で、10年以上入院患者数は1.3万人(13%)減少している。</p> <p>②統合失調症では、1年未満22.9%、1年以上5年未満25.3%であるが、10年以上は35.9%である。うつ病を含む気分(感情)障害では、その6割強が1年未満であり、認知症では1年未満と1年以上5年未満がそれぞれ約42%となっている。疾患によって入院期間による分布は大きく異なっている。</p>				

<http://www.yamadajuku.com/>

やまだ塾

Copyright(C) 2008 Shunsaku Yamada. All rights reserved.

	<p>③入院期間が長期化するほど、総数に占める統合失調症患者の割合が増える傾向にあり、10年以上では約85%にのぼっている。1999年と2005年で比較すると、10年以上の減少は統合失調症で顕著であり、1.2万人(14%)減少である。1年未満の増加は、統合失調症やうつ病を含む気分(感情)障害でも増加しているが、認知症疾患で特に増加が著しく、その増加は、1999年から2005年までの間で1.1万人(43%)である。また、1年以上5年未満の増加は、認知症疾患が1999年から2005年までの間で1.2万人(53%)増加していることによるものである。認知症疾患で入院期間が長期化する傾向が示されている。</p>
<p>【3】入院患者の分析(動態)</p>	<p>(入院期間1年未満患者の動態)</p> <p>①精神病床における年間新規入院患者数は、2002年に33.2万人であったが、2003年には35.6万人(前年比2.4万人(7%)増)、2004年には37.8万人(前年比2.2万人(6%)増)と、年々増加している。</p> <p>②他方、退院患者数についても、年間新規入院患者数と同程度の水準で推移しており、在院期間1年未満での退院が新規入院患者数の増加とほぼ同程度増加し、新規入院患者のうち入院期間1年以上に移行、つまり、新たに長期入院となる患者の数は、毎年5万人程度で横ばいとなっている。その結果として、精神病床の平均在院日数は短縮する一方であり、2006年には320日と、1989年に比べ約180日短くなっている。</p> <p>③また、精神病床における新規入院患者の87%が入院から1年以内に退院しており、1999年と比較しても、その割合は高まっている。また、退院患者のうち、在院期間が1年未満で退院した者の割合も約87%と高くなっている。1年未満の入院期間について、患者の入れ替わりが頻繁に起こっており、入院医療の急性期化が進んでいる。</p>
	<p>(入院期間1年以上患者の動態)</p> <p>①在院期間1年以上での退院は毎年5万人弱で推移しているが、新たに入院期間1年以上となる患者数が毎年5万人程度であるため、その結果として、1年以上入院患者数は23万人弱で大きく変化していない。</p> <p>②また、入院期間1年以上患者は全体の65%を占めているが、退院患者のうち、在院期間が1年以上で退院した者の割合は約13%、特に在院期間が5年以上で退院した者の割合はわずか4%にとどまっている。さらに、入院期間が長期化するほど、転院や死亡により退院する者の割合が高くなる傾向にあり、在院期間1年未満で退院する患者では転院や死亡による退院をあわせても16%程度であるのに対し、在院期間5年以上で退院する患者では、その割合が7割以上となっている。</p> <p>入院期間1年未満において入院医療の急性期化が進んでいる一方で、入院</p>

		<p>期間1年以上の長期入院患者では、その動態に近年大きな変化がみられておらず、今後、どのように地域移行を進めていくかが課題となっている。</p> <p>【4】受け入れ条件が整えば退院可能な者の分析</p> <p>(患者調査による分析)</p> <p>①「精神保健医療福祉の改革ビジョン」では、患者調査の「受入条件が整えば退院可能な者」(2002年調査で6.9万人)について、精神病床の機能分化・地域生活支援体制の強化等、立ち後れた精神保健医療福祉体系の再編と基盤強化を全体的に進めることにより、10年後の解消を図ることとしている。</p> <p>②「2005年患者調査」では、精神病床の入院患者のうち、受入条件が整えば退院可能な者は約7.6万人で約23%となっており、その内容は以下のとおりである。</p> <p>(1)入院期間別にみると、1年未満入院患者が約2.5万人(受入条件が整えば退院可能な者の約33%)、1年以上5年未満入院患者が約2.2万人(同約30%)、5年以上10年未満入院患者が約1万人(同約14%)、10年以上入院患者が1.7万人(同約24%)となっている。</p> <p>(2)年齢別にみると、受入条件が整えば退院可能な者のうち55歳未満の者は約30%、55歳以上の者は約70%となっている。65歳以上の者は45%を占めている。</p> <p>(3)疾患別でみると、統合失調症の患者が約4.4万人で約6割を占め、認知症疾患の患者が約1.3万人で約18%となっている。</p> <p>(4)疾患別の入院患者のうち、受入条件が整えば退院可能な者の割合を入院期間別にみると、統合失調症では、入院期間1年未満で約24%、1年以上5年未満で約27%、5年以上10年未満で約16%となっているが、入院期間10年以上では約1/3強と最も高くなっている。一方で、認知症疾患では、入院期間1年未満で約45%、1年以上5年未満で約41%となっており、異なる分布となっている。</p> <p>受入条件が整えば退院可能な者は、入院期間、年齢、疾患によってさまざまであり、地域生活への移行のための方策を考えていくに当たっても、十分な留意が必要とされている。</p> <p>参考:</p> <p>(病床調査による分析)</p> <p>①「精神病床の利用状況に関する調査」(「病床調査」)では、「受入条件が整えば退院可能な者」の割合は約34%に上っており、2005年患者調査の結果よりも高い割合となっている。</p> <p>②「病床調査」では、「居住先・支援が整った場合の退院の可能性」についても調査を行っており、これもあわせて分析を行うと、受入条件が整えば退院可能な者のうち「現在の状態でも、居住先・支援が整えば退院可能」な者は15%</p>
--	--	---

	<p>(全体の約5.2%),「状態の改善が見込まれるので, 居住先・支援が整えば退院可能」な者が73%(全体の約24.6%)となっており, 医師が「受入条件が整えば退院可能」という場合には, 居住先や支援の確保の状況に加え, 将来の状態の改善も見込んでいる可能性が示唆されている。</p> <p>③一方で,「病床調査」の結果によると, 状態の改善と居住先・支援の確保のいずれかが整えば退院が可能となる者の割合が入院患者の6割強に上っている。そのうち「生命の危険は少ないが入院治療を要する」とされた者が約45%含まれており, 地域生活への移行のための方策を考えていく上で, 受入条件が整えば退院可能な者以外の患者についても念頭に置くことが必要とされている。</p>
--	---

(注)「問題 28 2002 年以降の「精神保健医療福祉施策の改革」に向けた経緯を概観せよ。」を参照のこと。